

中学生の調理実習における自己効力についての研究 —課題の重要度の認知との関連—

兵庫教育大学 ○中井昌子 石岡富貴子 織部ミチ子

目的 自己効力 (self-efficacy) は「課題に直面したとき、効果的に遂行できる自信」と定義され、生徒の学習における積極的な行動の促進に影響を及ぼすと考えられている。本研究では中学生の調理実習に対する自己効力を高める要因を明らかにすることを目的に生徒が調理実習の価値や重要性を認識している程度との関連性について検証を行った。

方法 調理実習の自己効力を測定する尺度は、学校での調理実習で望ましい結果を得るために必要と思われる下位行動を示した項目と、それぞれに異なった操作を含む調理を示し、生徒が各自できると思う程度に応じて10段階で答えるようにしたものを用いた。重要度を測定する尺度は、学校での調理実習についての価値や重要性の認識の程度を測定することができると思われる項目を示し、二件法で答えさせた。これらの尺度を用いて中学生を対象に調査を実施し結果を得点化し、自己効力の高さや価値や重要性の認識の程度との関連を検討した。また、学校での調理実習の実施前と後に自己効力を測定し、その変化と課題の重要性の認知との間の関連の有無についても検討した。

結果 本研究の調査対象の中学生においては、学校での調理実習の価値や重要性を高く認識している生徒は調理実習に対する自己効力が高いという結果が得られた。また、学校での調理実習実施前と実施後の自己効力の得点差と重要性の認知との関連は、実習の実施回数が1回の場合は関連が認められず、数回実施された場合には関連が認められた。